キリスト教学研究室紀要
第4号 2016年 3月 01~03頁

キリスト教学研究室とティリッヒ
―ティリッヒ歿後 50 年を記念して―

芦名定道

2015 年度の『キリスト教学研究室紀要』第 4 号は、「ティリッヒ特集」として企画されたが、なぜ京都大学キリスト教学研究室の紀要で、ティリッヒ没後 50 年の特集を行うのかについて、つまり、キリスト教学研究室とティリッヒとの関わりについて、説明しておきたい。

ティリッヒとの関わりということで、まず思い出されるのは、1960 年の日本訪問に際して、ティリッヒが、京都大学で講演と講義を行ったことである。高木八尺編訳『ティリッヒ博士講演集　文化と宗教』（岩波書店、1962 年）によれば、それは、次の日程と題目であった。

5 月 25 日の京都大学での講演「宗教と文化」

5 月 27 日、6 月 1 日 3 日 10 日の京都大学での連続講義「宗教哲学の諸原理」

これだけからも、ティリッヒと京都大学との深い学問的な関わりがうかがえる。実際、京都大学･基督教学講座の設置に尽力し､その初代主任教授となった波多野精一（1877-1950 年）には、ティリッヒへの直接的言及は見られないが――東京神学大学図書館の波多野文庫にはティリッヒの文献が含まれているものの――、波多野宗教哲学は、問題意識・思想内容においてティリッヒのそれときわめて類似している。その点については、次の拙論を参照いただきたい。

芦名定道「宗教的実在と象徴――波多野とティリッヒ」
（現代キリスト教思想研究会『近代/ポスト近代とキリスト教』2012 年、3-21 頁）。

芦名定道「アガペーとエロース――ニーグレン・波多野・ティリッヒ」
（京都大学基督教学会『基督教学研究』第 27 号 2013 年、23-41 頁）。

太平洋戦争後に基督教学講座の教授となり、現在のキリスト教学研究室の基礎を築いた有賀鐵太郎になると、ティリッヒとの関わりはより直接的かつ明確なものとなる。有賀は、1930 年に同志社大学文学部神学科教授に就任後、1935 年にユニオン神学校に再留学し（同志社大学卒業後、1922 年に一度目の留学）、1936 年に『オリゲネス研究』で、Th.D の学位を授与された。ティリッヒがユニオン神学校で教えていた期間が 1933 年から 1955 年であったことから考えて（初めは客員教授として）、有賀とティリッヒの出会いは有賀のユニオン神学校再留学の時期に遡ることが推測できる。しかし、土居真俊によれば、有賀は 1934 年に同志社大学で『社会主義的決断』（1933 年）の講読を行っており（土居真俊『ティリッヒ』　日本基督教団出版局、1960 年、239 頁）、有賀のティリッヒへの関心は再留学以前からのものであったとも考えられる。有賀は、1960 年のティリッヒ日本訪問の受け入れ側の中心人物の一人であり、京都大学での講演の通訳を担当した。また、ティリッヒとの思想面での関わりは、『キリスト教思想における存在論の問題』（著作集４，創文社、1981（1969）年）の「第四章　現代神学における存在論的一断面」において、現代の存在論的思惟の代表としてティリッヒを論じることによく現れている。

しかし、ティリッヒの神学あるいは哲学との思想内容に本格的に踏み込んだ関わりが明

瞭に確認できるのは、有賀に続いて、基督教学講座の主任教授となった武藤一雄である。武藤のティリッヒへの内在的かつ批判的な論究は、現在のティリッヒ研究の水準から見ても本格的なものであり、それは、次の著作・論文などにおいて確認できる。それは、ティリッヒの「相関の方法」との神学的宗教哲学的な方法論レベルでの対論と解することができるであろう。

『神学と宗教哲学との間』（創文社、1961 年）、特に「第三章　歴史主義の諸問題」「第四章　終末論の諸問題」

「神学的宗教哲学について」（1983 年）（『神学的・宗教哲学的論集Ⅱ』創文社、1986 年、3-21 頁）。

また、ティリッヒとの思想的な関わりとしては、波多野の退職（1937 年）から有賀の就任（1948 年）までの間の時期、講師また助教授として基督学講座を担当し、その後関西学院大学に移った松村克己も挙げることができる。松村は『根源的論理の探究』（岩波書店、1975 年）の「第一部」で、「一　根源的論理の探究、二　信仰の論理――アナロギア、　三 Analogia Imaginis」を論じているが、ここでのアナロギア・イマギニスとは、ティリッヒがキリスト論との関わりで提唱したアナロギア論であり、松村とティリッヒの関わりの特徴がよく現れている。

このように歴代の主任教授らがティリッヒと深い関わりにあったことからも予想できるように、キリスト教学研究室出身の研究者で、ティリッヒについて論究した者としては、今井晋、小川圭治、金子晴勇など、多彩な人々が挙げられる。しかし、特にティリッヒ研究という点で忘れてならないのは、森田雄三郎であろう。森田は、フルブライト留学生として 1963-64 年に、ユニオン神学校に留学したが、ちょうど刊行されたばかりの、ティリッヒ『組織神学』第三巻（1963 年）について、ユニオン神学校の演習で報告を行うなど、ティリッヒ神学に深い関心を有していた。『キリスト教の近代性』（創文社、1972 年）の「第九章　キリスト教の弁証の歴史性（実存論的神学と「伝統の神学」と「弁証神学」）」の論述は、森田のティリッヒ論の代表的なものである。

以上のようにして、京都大学キリスト教学研究室とティリッヒとの学的関わりは形成されたわけであるが、それは、その後、次のような形となって展開することになる。

一つは、日本におけるティリッヒ研究の発展に貢献した『ティリッヒ著作集』（白水社）の刊行に、キリスト教学研究室の関係者が、次のような仕方で関与したことである。

水垣渉：『ティリッヒ著作集　第二巻（倫理の宗教的基礎）』（白水社、1978 年）の翻訳と解説。

武藤一雄と片柳栄一：『ティリッヒ著作集　第十巻（出会い）』（白水社、1978 年）の翻訳と解説。

田辺明子：『ティリッヒ著作集　第七巻（文化の神学）』（白水社、1978 年）の後半 13 篇の翻訳。

なお、水垣と片柳は、武藤一雄に続くキリスト教学研究室の主任教授である。

もう一つの展開は、1999 年から 2007 年まで継続された「ティリッヒ研究会」の活動である。この研究会の成果は、『ティリッヒ研究』（創刊号～11 号）に収録され、京都大学学術情報リポジトリ（http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/57565）で読むことができる。また、この研究会の共同研究の成果として、ロナルド・ストーン編『パウル ティリッヒ　平和の神学　1938-1965』（新教出版社　2003 年）の共訳も挙げられる。

最後に、ティリッヒとキリスト教学研究室の関わりとして指摘したいのは、キリスト教

学研究室の出身者によって、ティリッヒ思想をテーマとした少なからぬ数の博士学位論文が執筆されたことである。

芦名定道「Ｐ．ティリッヒの宗教思想研究」（1994 年）
今井尚生「前期Ｐ．ティリッヒの思想展開における歴史の問題」（1997 年）
川桐信彦「ティリッヒの芸術神学」（2006 年）
近藤剛「初期ティリッヒ思想研究」（2007 年）
鬼頭葉子「後期ティリッヒの宗教思想における歴史と共同体の再構築
——時間・空間概念を手掛かりに——」（2010 年）

これまでの説明からご理解いただけるものと思われるが、ティリッヒは京都大学キリスト教学研究と深い学問的な関わりのある思想家であり、こうした事情から、2015 年度の『キリスト教学研究室紀要』では、ティリッヒ没後 50 年を記念して「ティリッヒ特集」を企画した次第である。